

『日本占領と「敗戦革命」の危機』

◆著者——江崎道朗
◆発行所——PHP研究所
◆定価——一、二〇〇円(税別)



ISBN : 978-4-569-84129-8

いまや保守論壇の旗手となった感のある江崎道朗氏の「コミンテルンの謀略と日本の敗戦」の続編である。本書では、一般に知られていない敗戦直後の日本の共産化の危機を描く。

コミンテルンの戦略は、対象国に工作員を送り込み、秘密裏に世論を誘導して対象国同士を戦わせる。その破壊と混乱に乗じて、共産党政権を樹立するというものだ。これを「敗戦革命」と呼ぶ。彼らは日本を米英と戦わせ日本を敗戦に追い込むことに成功したが、その最終目標はわが国の共産化にあった。日米戦争と日本の敗戦革命は一連の計画であって、そ

れはわが国以外に、米ルーズベルト政権内と延安の中国共産党の2か所で周到に準備されていたという。

ルーズベルト政権が共産主義者の巣窟であったことは有名だが(300人以上の工作員と協力者がいた)、本書では、コミンテルンが民間シンクタンク「太平洋問題調査会(IPR)」や雑誌「アメリカ」などをフロント組織として、米国の政策を反日親中から対日戦争に誘導し、さらに天皇排除などの日本占領方針まで打ち出していたことを明らかにする。その中心メンバーは、実際にGHQ職員として占領政策に携わることになる。一方中国で

は、八路军と日本共産党の野坂参三が中心となって支那事変で投降した日本兵捕虜を洗脳し対日工作員として養成していた。

満を持してわが国に乗り込んだGHQ、とくに民生局は、プレスコードで言論を封じ、治安機関を解体し、労働組合を全国で結成させ、抵抗者を公職追放し、一方で捕われていた共産主義者を釈放し、さらに中国から野坂参三を迎えて敗戦革命への準備を整える。1947年2月1日に予定されたゼネストとそれに伴う社会混乱こそがその危機の頂点だった。

これに対し吉田茂は、GHQ内で共産革命の動きを察知したチャールズ・ウィロビーと連携して、直前でマッカーサーにゼネストを禁止させる。マッカーサーは、憲法を日本に受け入れさせるために吉田を支持せざるを得なかったという。評者は、吉田茂がああ屈辱の憲法と引き換えに昭和天皇を守ったと理解していたが、同時に日本の共産化をも阻止したのだと本書に教えられた。

ところで、前著で筆者は保守自由主義者・小田村寅二郎の側近だった小柳陽太郎氏(元修猷館高校教諭)に指導を受けたと述べている。その陽太郎氏の子息である小柳左門先生は、評者の教室(九州大学循環器内科)の先輩にあたる。不思議な縁を感じずにいられない。

(広報部部員 満岡 渉)